

草の芽句会だより

NO,121
18,9、6

見慣れたる城山の木々秋めける
秋の入り家紋提灯さゆらげる
純子

昭和てふ時代に生きて終戦忌
文子

出湯ゆの宿に平家の悲話や虫すだく

花散らし台風過ぎて恙なし
一の門に家紋の提灯秋来たる
節子

搦手のサフランもどき残し刈る
古城の草の茂りに勤皇碑
範子

足元に萩の風くるベンチかな
蝸の声の従きくる城歩く
剋子

点滴のぽつぽつ落ちる夜長かな
病室に瀬戸橋見ゆる秋の空
禮子

こおろぎの夜風涼やか庭に佇つ
雨上がる闇に親しみちちろ鳴く
貞子

歳時記の字の小ささよ秋灯
休耕田増えし野道やちちろ鳴く
貞

秋一と日大きく照つたり曇つたり
わが庭も秋の気配や荒れしまゝ
芳子

出席者 森 大黒 氏家 吉崎 小山
投句者 馬場 川原 真鍋 小林

台風一過、うるし林にはもう黄色く色付いた桜葉が一面に散っていた。梢で蝸が鳴いている。日射しはまだ強いけれど、まぎれもない夏の終わりを感ずる。萩は枝先に花をつけ始めていた。石のベンチに腰掛けてしばし萩の風を楽しむ。昔この萩園を寿子先生と歩いたことがある。耳をすませると萩叢から先生のお声が聞こえてくるよう。城山には長い歳月の想い出が今も尽きない。馬場さんが体調を崩されて、しばらく吉崎さんが句会のお世話をして下さることに。そろそろ夏の疲れが出てくる頃。ついこの間まで若さを誇って？いた私達も気をつけなければと思う。

